



(徳島)

# 徳島・庄・蔵本遺跡

- 1 所在地 一 徳島市蔵本町二丁目、二 同蔵本町三丁目
- 2 調査期間 一 一九九六年(平8) 十一月～一九九七年五月、  
二 二〇〇六年四月～七月
- 3 発掘機関 徳島大学埋蔵文化財調査室
- 4 調査担当者 一 中村 豊、二 中村 豊・中原 計
- 5 遺跡の種類 集落跡・軍事施設跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

庄・蔵本遺跡は、徳島市中心部の南側、四国山地東北端の眉山北麓に位置し、吉野川水系で最も下流の支流鮎喰川の形成する三角州性扇状地(デルタファン)上に立地する。弥生時代前期の環濠集落を中心とし、縄文時代から現代までの遺構が重複する複合遺跡である。

縄文時代後期後葉ごろか

ら活動の痕跡を確認でき、弥生時代前期末・中期初頭ごろまでは、鮎喰川旧河道からの洪水を受けるような環境にあったが、この時期を境に、一五世紀ごろまで安定化し、土壌層を形成している。中世後葉・近世初頭ごろから再び不安定となり、排水不良のグライ粘土層を耕作土とする水田を営んでいる。明治初期の水田層を確認できるが、そこへ盛り土を施して、造成を行なっている。造成後に新しく営まれたのが、帝国陸軍第一師団歩兵第四三連隊の駐屯地(一九二五～一九四五)である。付近一帯が接収され、射撃場・練兵場・兵営・陸軍墓地からなる大規模な軍事施設を形成していた。発掘調査や工事立会などでは、しばしば兵舎のレンガ基礎や「たこつば」などが確認されている。しかし、遺跡の中心はあくまでも弥生時代であるため、戦跡遺構の調査は十分にできていないのが現状である。駐屯地は戦後、県と国に分割され、兵営部分が新制徳島大学医学部となった。

第一五次調査は医学部共同溝地点で実施したもので、二重の溝に囲まれた弥生時代前期前半の環濠集落を検出し、江戸時代・近代の遺構も確認した。第一九次調査は医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修地点で実施したもので、弥生時代前期の水田などが検出されるとともに、攪乱土坑より戦跡関連遺物が出土した。

今回報告する木簡は、第一五次調査において攪乱土坑から出土した一点と第一九次調査において攪乱土坑から出土した一点、計二点

である。木簡は、現在のところ近代軍事施設以外からは出土していない。

なお、文字資料としては、一九八二・八三年度の調査において、一〇世紀の墨書土器〔賀専当〕〔加茂〕〔厨〕など〕が出土している。

## 8 木簡の釈文・内容

### 一 第一五次調査

#### (1) 〔○予備〕

43×25×4 011

四周を切断して長方形に仕上げた小型の木簡で、上部に穿孔がある。何らかの物品の予備品に付した付札であろう。

### 二 第一九次調査

#### (1) 〔対空射撃部隊 岡部隊〕

640×160×20 061

立て札。長さ二二八mm幅一二六mm厚さ一五mmの長方形板の短辺片側を三角形に切り、両斜辺に傘状に細長方形の板を釘付けする。この札を立てるため、断面が一辺一八〇mm、長さが五六〇mmの角材を先端を尖らせて背面にあて、文字面側から長い釘で打ち付けている。釘の余った部分は角材に折り付けられている。

文字は漆で書かれており、木質の風化により現状では漆文字部分が浮き出たようになっている。おそらく、終戦間際の空襲に備えた

対空高射砲部隊を示すものであろう。「撃」の字形は、正字「撃」の一部をとった「恵」。二行目の読み方は、「岡」部隊か「岡部」隊か不明である。

(中村 豊・定森秀夫)



一(1)



二(1)